

「153 匹のもったいない」

ヨハネによる福音書 21 章 1～14 節

皆さんはどこかで、「魚」の形をしたデザインというかロゴというか、あるいは飾りというか、そうした「マーク」のようなものを御覧になられたことはないでしょうか。例えば、牧師の就任式や教会の献堂式のようなときに記念の品として本の^{しおり}葉がプレゼントされたりしますが、その葉などによく用いられているようです。それだけでなく、自動車の後ろにも、このデザインのステッカーが貼られているのをしばしば目にします。魚の形の^{りんかく}輪郭が太い線^かで描かれていて、その胴の部分の内側にあまり^{なじ}馴染みのないちょっと変わった文字が幾つか書き込まれているという、そんなデザインです。実は、これはほかでもない、キリスト教が長い間使ってきた歴史的なシンボルマークの一つで、ここに書かれている文字(ΙΧΘΥΣ/ΙΧΘΥΣ)は新約聖書の書かれたギリシア語です。そして、それらの文字の一つひとつがそれぞれに、ある言葉の^{かしら}頭文字になっています。^{あたま}頭のほうから順に言うと、「イエス(Ιησοῦς) / キリスト(Χριστός) / 神の(θεοῦ) / 子(υἱός) / 救い主(σωτήρ)」というふうに、それぞれがそれぞれの頭文字になっているわけです。そして、それらの頭文字を全部^{つな}繋ぎ合わせると、「魚(ΙΧΘΥΣ, -ύος, ό)」という言葉が出来上がるといったぐあいです。ですので、^{だいたい}教会の信仰者たちは代々、この魚のシンボルを使って「イエス・キリストは神の^{みこ}御子で、我らの救い主である」と、そう言い表わしてきました。「シンボルなんて、そんな面倒くさいことをしないで、そのまま口で言えばいいのに」と思われるかもしれませんが、でも、それができなかつたから、そうしたわけです。クリスチャンだと分かたら、捕らえられて、獄に入れられるかもしれません。命を奪われるかもしれない。そんな迫害の時代が長い間、続きました。ですから、人々は「魚」のマークをいわゆる「暗号」のようにして、お互いが同じ信仰の兄弟姉妹であることを確かめ合ったのでした。そのようにして「信仰の告白」のシンボルとされていったその「魚」が、今月の場面でも^{たいやく}大役を仰せつかっているような印象を受けます。主役の一端を担っている感じがしないでしょうか。

今月はこのほかにも、様々なことを連想させたり思い起こさせたりすることが幾つも出てきます。舞台になっている「湖」とか、魚が「とれた」とか「とれなかつた」とか、あるいはまた「パン」と「魚」を食べる「食事」の場面とか、それらからいろんなことを思い浮かべられないでしょうか。折にふれ 聖書クイズなどをして楽しむ教会もあるようですが、この箇所などはその「クイズネタ」に格好のところかもしれません。しかも、そこに豊かなメッセージが置かれているとしたら、なおのこと、楽しい学びの材料になるように思われます。クリスマスの祝会などにいかがでしょうか。

今月の箇所はそのような場面ですが、これまでも何度か申し上げたように、「ヨハネによる福音

書」は元々は 20 章で閉じられていたと考えられています。21 章はその「補遺」として、つまり大切なことを補足するものとして、後で おそらくはヨハネの教会によって書き足されたものと一般的には考えられています。ですので、実は、よく分からないことが幾つかあります。なかでも一番不思議なのは、すぐ前の 20 章で 甦よみがえられたイエス様にみんながお会いし、「あなたがたに平和があるように」(20:19、21、26) と、慰めと励ましの言葉を 3 度も頂いているわけです。そして、これからすべきことを告げられ、人々のもとに遣わされた。それなのに どうして、今回のところでまた、故郷のティベリアス湖に戻ってしまっているのか、ということです。馴染みの名前と言うと「ガリラヤ湖」ですが、そのガリラヤ湖にまた戻ってきてしまっていることです。復活のイエス様にお会いして、元気澆はつらつ刺。「さあー、出ていくぞ！」と気持ちも高ぶっているかと思いきや、どうもそのようにはみえません。むしろ反対に、どこか気分が沈んで、エネルギーレベルが下がっているようにみえます。いったい、どういうことなのでしょう。ある人はこんなふうに想像しています。「復活の主イエスにお目にかかりはしたものの、自分たちがこれから何をどうしていったらいいのか、それがまだ、どうもよく分からない。だから、落ち着かなくて、心苦しくもある。そんなとき、生活上の必要もあって、かつて知ったる漁にでも行こうかと、そう思ったとしても不思議はないのではなかろうか」。たしかに、そうだったかもしれません。が同時に、別の人たちが別の推測で言っているように、先々のことが見えないためにやはりまだ不安で、心に揺れ戻しがあったのかもしれませんが。ただ、「これ」という確かなことはどうも分からないように思われます。けれども、弟子たちがいわゆる安心立命あんしんりつめいのような心持ちには完全にはなっていなかったということ。途惑っていたのか不安だったのか、あるいは疲れていたのか、さらには恐くなって怖おじ気けづいてしまったのか。そのどれであったにせよ、弟子たちがそう簡単ではないところに、さらに言うなら、むしろ難しいところに立たされていたということ。そのことだけは間違いのないと言えるのではないのでしょうか。決して容易ではない現実が目の前に待ち受けていたからです。

というわけで、(編集史的な諸問題も含め) 確かなことはいま一つ分からないものの、「その後」のちという 1 節の書き出しを受け、一応、20 章以降の出来事として、今月の箇所を読み進めていきたいと思えます。たとえそうであっても、そこには実に豊かなメッセージが今もなお置かれているからです。それは実際、この私を親しく慰め、癒やし、そして温かく励まして、もう一度 立ち上がらせてくれます。

今月のストーリー自体は、一読してお分かりのように、それほど複雑なものではありません。弟子たちが、合計すると全部で 7 人になるのでしょうか。ほかの弟子たちはもしかすると、エルサレムにとどまっていたのかもしれませんが。その 7 人の弟子たちがペトロやゼバダイの子たち——ヤコブとヨハネの兄弟です(マタイ 4:21 他)——の故郷のガリラヤに戻って、夜、湖に魚をとりに出たわけです。ガリラヤ湖は、夜の間が一番、漁に向いていたと言われています。しかも、市場いちばに魚を出す漁師たちの場合、それを朝一番で出すためにも、夜の漁が望ましかったといえます。かつて漁師だったときのそんなことも思い出していたのでしょうか。ペトロはそうようにして、夜、漁に出ていきます。

それを知って、ほかの弟子たちも一緒についていきました。ところが、「その夜は何もとれなかった」と、3 節が記しています。それなのに、イエス様が「もう一度、今度は舟の右側に網を打ってみるがよい」(6) と、そう言われます。そして、その言葉のとおり網を打つと、なんと「網を引き上げることができないほどの大漁になった」(同) というのです。しかも、それだけでなく、魚をとった弟子たちが岸に上がってみると、「そこには炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、パンもそこにあった」(9) といひます。そのようにして、今とってきたばかりの魚も加え、イエス様と一緒に食卓に弟子たちが招かれて、その食事にあずかった。これが今回の出来事のあらましです。終わりの 14 節によれば、復活された後、イエス・キリストが弟子たちに——弟子たちだけに限って言えばということですが——その御姿を現わされたのは「これで 3 度目のことである」と言われています。墓の前でマグダラのマリアにお会いになられたことを入れると 合わせて 4 回目ということになりますが、この間のやり取りや弟子たちの様子などにはいろんなことを考えさせられるように思います。とりわけ、ペトロの慌てぶりには思わず吹き出してしまう。皆さんはいかがでしょう。どんなことを思い浮かべ、どんなことに気づかされるでしょう。そして、聖書からのメッセージとして、どんなことを示されるでしょう。

私は今回、視点を特に 2 つのことに据え、2 つの言葉と一緒にそれを考えたいと思われています。一つは、「それにしても、ここでもまた」という言葉です。あと一つは、「再体験」という言葉がそれです。

どういうことかという、それにしても、ここでもまた「4 節」ではないでしょうか。「弟子たちは、それがイエスだとは分からなかった」というのです。一度目の漁のとき、弟子たちは何もとれずに、岸に向かって戻りかけていたのだらうと思われまふ。そのとき、その岸辺にイエス様が立っておられるのを目にした。なのに、弟子たちはそれがイエス様だとは分からなかった。そう、聖書は語っています。というようなあり様を教えられて、皆さんは思い起こされなないでしょうか。「ああ、そういえば、お墓の前のあのマグダラのマリアも同じだった。エマオに向かっていたあの 2 人の弟子たちも同じだった。復活のイエス様にお会いしてるのに、それが主イエスだとは分からなかった」。それぞれ、ヨハネ (20:14) とルカ (24:16) の福音書が記していることですが、それがここでもまた書き留められています。イエス・キリストのことを知る機会はいくらでもあるのに、また それは現に目の前に示されているのに、イエス様のことに気づくことがない。そのような私たちの「鈍さ」を言っているのでしょうか、次のそれにしてもは、その場面がここでもまた「食事の席」だということ。す。

エマオのあの二人がその目を開かれ、目の前におられるのがイエス様だと分かるようにされたのがどんな時だったか、覚えておられるでしょうか。「一緒に食事の席に着いたとき」(ルカ 24:30) だったと、ルカはそう記しています。今月の弟子たちの中に名前の書かれていない「ほかの二人の弟子」(2) というのが出てきますが、この二人の弟子たちはもしかすると、エマオのあの二人だったかもしれません。そして それは、——五千人の給食や最後の晩餐での事柄に加え、いま一つ——イエス・キリストを想う私たちの想いが日ごとの食事をしてるような そのような日常のこと

となるようにと、そう教えるものなのかもしれません。もうだいぶ前のことになりますので、覚えておられる方がどれくらいいらっしゃるでしょうか。戦後すぐの光景でしょうか。狭い畳の部屋で小さな家族が丸い「ちゃぶ台」を囲み、食前の感謝の祈りをしている絵です。ちゃぶ台といっても、若い人たちにはもう分からないかもしれませんが、丸い形をした小さな座卓とでも言ったらいいでしょうか。それを囲んで、質素な食事を前にし、感謝の祈りをしている。たしか、坊っちゃん刈りの男の子もそこにいたかと思います。そのような絵が額に飾られていたり、教会学校の出席カードの絵にされて、子どもたちにプレゼントされたりしていました。そして、そこに一つの言葉が添えられていた。「食卓にもイエスキヤマが・・・」との、そのような言葉でした。うろ覚えで多少記憶違いもあるかもしれませんが、そのようにして、日々食事をするようなときにも、そこに主イエスがいてくださっていることを忘れないでいるということ。イエス様への想いをそのように普段のものとし、そして心が乱れそうになるときにも、穏やかで平静な心を頂いていくということ。弟子たちがイエス様と一緒に食事にあずかったというのには、そんなメッセージも含まれているのかもしれません。

そして、その弟子たちにそこで差し出されたのが「パン」と「魚」でした。ここでもまた、です。なぜならば、「パン」といえば、思い起こされないでしょうか。先ほどすでに触れましたが、十字架を前にしたあの「最後の晩餐」のときにも、イエス様は「パン」を弟子たちに分かたれました(ヨハネ 13:21~30)。それだけではありません。今回と同じ、ガリラヤ湖のほとりでのことです。すぐ近くの小高い丘の上で 5,000 人の人たちに食べ物を分け与えられたとき、それがいったい何だったか、覚えておられるかと思います。「5つのパンと2匹の魚」でした(ヨハネ 6:1~15)。ちなみに、エマオの二人がイエス様と一緒に食事の席に着いたとき、そこで口にしたのもまた「パン」でした(ルカ 24:30)。ここでもまた、ここでもまた、です。弟子たちはこうして、あのとき・このときにイエス様からパンや魚を頂いて 食事を共にしたこと、そのことを昨日のことのよう、このとき思い出したのではないのでしょうか。こうしたあれこれから、十字架の受難の週に記念の晩餐式をまもる教会の中には、今日でも、パンとぶどう酒に さらに「魚」も加えてその式を行なっているところがあるといひます。初めに御紹介した魚のシンボルマークには、このような様々な意味合いが込められているのかもしれません。

けれども、それより何より、です。何よりも目を惹かれるのは「ペトロ」の姿ではないでしょうか。その夜、漁に出たペトロたちは、何もとることができませんでした。ところが、イエス様に言われてもう一度 網を打つてみると、魚がとれすぎて、網を引き上げられないほどになります。そこで、たぶん、網を引きずりながらでしょう。岸に戻りかけていたのだらうと思います。その途中で、(おそらくは、12 弟子の一人のヨハネかと思われませんが)「イエス様の愛しておられた弟子」(7)がイエス様のお姿を認め、「あっ、あれは主だ」(7)と声をあげます。それを聞いたペトロは、大慌てです。裸のままでは、イエス様の前に出にくかつたのでしょう。岸に着く前に、「上着を着て」(7)湖に飛び込みます。水に入るのなら、普通は「上着を脱いで」でしょうけれども、ペトロのこの慌てようはどこかユーモラスで、吹き出してしまいます。そして、「二百ペキスばかり(ほぼ 90 メートルくらいでしょうか)」(8)の沖合いから みんなが岸に戻ってみると、どこから手に入

れられたのか、イエス様が炭火を起こして、魚を焼いてくださっている。ペトロはたぶん、一人だけ泳いで、^{あと}後から岸に着いたのでしょう。いずれにしても、そんなふうにして、主イエスが復活の御姿を現わしてくださり、みんなと食事を一緒にしてくださったのです。これが今月の出来事の全体ですが、それこそ「それにしても、ここでもまた」と思われるのです。どういうことかという、この光景はどこかで一度、目にしたように思われるからです。そして実際、そのとおりで、それはルカによる福音書の5章に記されています。ルカの5章1節以下を見てみると、主イエスが故郷のガリラヤで宣教を始められたころのことです。ゲネサレト湖（ガリラヤ湖）の岸辺で人々に説教をしようとして、そこで漁をしていたペトロに「舟を貸してくれないか」（ルカ5:3）と頼まれます。そして、岸から少し離れたところまで舟を出してもらい、その舟の上から話をされたわけです。これに続いてのことでした。ペトロはそのとき、一晩中 漁をしても何もとれないでいました。しかし、そのペトロに対して、この^{あと}後、イエス様はこうおっしゃられた。「沖に^こ漕ぎ^だ出して、もう一度、網を降ろしてみるがよい」（ルカ5:4）。そして、ペトロがそのとおりにしてみると、網が破れそうなほどの大漁になったというしだいです。しかも、ペトロはこのとき、この大漁の出来事に驚いて、思わずイエス様の足もとにひれ伏して、こう叫んでもいます。「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」（ルカ5:8）。いかがでしょうか。今月の場面とそっくりではないでしょうか。私はこう思われます。「ペトロはきっと、この時の光景を思い起こしていたのではないか。この時の自分がまざまざと、目の前に甦っていたにちがいない」。そう思われています。

つまり、イエス様はここで、ペトロのかつての体験をもう一度「再体験」させてくださっている。今このとき、重ね合わせるようにして、それをもう一度 思い起こさせてくださっているように私には思われるのですが、皆さんはいかがでしょう。このとき一緒にいたかもしれないエマオの二人も同じです。同じようにして、自分たちが目を開かれたときのあのイエス様との食事の場面を再体験させてもらったのかもしれない。それは弟子たちにとって大きな慰めであり、また励ましかったろうと思います。なぜならば、何かあるたびに心を揺さぶられ、信仰がおぼつかなくなった弟子たちです。「そんな自分たちなのに、イエス様はそのたびごとに、また同じような心配りをしてくださる。何度でも繰り返してそうしてくださり、この自分たちを育ててくださる」。弟子たちはきっと、そう感じ取ったのではないのでしょうか。4つの福音書はどれも、弟子たちの側のこととしてはそもそも、ドジと挫折と不信仰の記録でしかありません。なのに、イエス・キリストはそこに何度でも、慈しみの^{みて}御手を伸べてくださった。そのようにして、心を込めて、愛する者たちを育み育ててくださった。それがそもそも、福音書の記録というものなのではないかと思うのです。そうでなかったら、甦^{あと}られた後、なにも40日もの間、弟子たちと一緒にいる必要などなかったはずです。すぐにでも天に帰られたらよかった。そんなさならなかったのは、その間、弟子たちに改めての^{かん}配慮と訓練をなされたからではないのでしょうか。イエス・キリストが愛する弟子たちのために、「それにしても、ここでもまた」「再体験」させてくださったことの記録。神様が愛するこの私たちのために、「それにしても、ここでもまた」あれもこれものことを繰り返して、そのようにして「再体験」させ

て想い起こさせ、そして教え育んでくださっていることの証し。それが一つには、私たちの「聖書」というもののように思われます。

弟子たちは、楽でない毎日をおくってきました。今また、容易でない使命が目の前に待ち構えています。疲れて、足が止まってしまうかもしれません。けれども、イエス・キリストの慈しみはそのようなところにこそ、繰り返し注がれてきたのではないのでしょうか。私たちの歩みもまた、気持ちがハイで飛んでいるような時もあれば、ローで沈んでいる時もあるにちがいありません。それが普通であって、弟子たちからして、そもそもそうでした。それを、イエス・キリストが手をかけ、時間をかけ、そして何より心を傾けて 育み育ててくださる。いろんな闘いのなかで、私たちを励ましながら、そうしてくださると信じています。

こんな、名言と言いましょうか 鋭い指摘とでも言いましょうか、ラジオの子ども相談室にでも寄せられそうな子どもの質問をお聞きになったことはないのでしょうか。こんな質問です。「ビタミンはどうして、ほうれん草の中にあるの？ アイスクリームの中にあるほうがいいのに」。「ビタミンが大好きなアイスクリームの中にあれば、アイスクリームをいっぱい食べられるのに。ほうれん草じゃ、食べたくないよ」といういかにも子どもらしい、けれども、とても含蓄の深い一言です。どうして、美味しくなくて食べたくもない「ほうれん草」のほうにビタミンがあるのか。それは神様に聞くしかありませんが、でも、この私たちを真実 培い、強く丈夫な人間にしてくれるのは実は、美味しくなくて食べたくもない そのような容易でないあれこれのほうなのではないか。荒れ野のように闘いを余儀なくされる そのような難しいところにおいてこそ、私たちは神様によって、本当に豊かで確かな人間にされていくのではないか。そのことはたしかに、一理ある大切な真理のように思われます。心地のよい毎日のなかで神様を信じて賛美するのも、それはそれでももちろん、喜ばしいことにちがいありません。しかし、そのような居心地のよいだけのところからは、「人」としての、そしてまた「信仰者」としてのその深みは決して養われることがないとも言われます。

旧約聖書のモーセもヨブもそうでしたし、新約聖書のパウロもそうでした。16 世紀に宗教改革を行なったマルチン・ルターは「神はわがやぐら、わがつよき盾」(『新生讃美歌』538 番) というあの有名な讃美歌を作っていますが (1529 年)、それもまた、悪意の皇帝にその命を狙われていたなかでのことでした。もう少し身近なところに話を移しますと、もう 22 年ほど前になるでしょうか。先妻の葬儀の席でのことです。いろいろとあった後でしたから、私にとって、生涯で一番きつかった時でした。ただ、そんななかで ただ一つ、思いがけないことがありました。それは、それまでお会いしたことのない 全く顔を知らない方がその席に出席して下さり、献花の後で、この私に言葉をかけてくださったことです。今もって、お名前すら分かりません。御婦人で、御本人は日本の方でしたが、英語教会のメンバーと言っておられました。実は、私はその英語教会に間借りしていた日本語の教会で牧師をしていたことがあり、その方のほうではこの私のことを知っておられたといひます。どうということかという、そこでは、日本語教会の礼拝時間・英語教会の礼拝時間というふうにして、

一つの礼拝堂を時間をずらして使い分けていました。ですので、英語教会のメンバーであっても、日本語の礼拝に出ようと思えば出られたわけです。そして、その方はそのようにして、両方の礼拝に出ておられたようでした。日本語の礼拝に出られるときには、ベランダの 2 階席に座って参加しておられたといいます。ですので、私のほうでは気づかなかったのですが、その方のほうでは、説教をするこの私を御覧になり、知っておられたというわけです。その方が、その後 何年も経った後でのことです。どこで知らせを耳にされたのか、葬儀にわざわざ足を運んでくださいました。そして、この私に言葉をかけてくださった。「先生は御存じないでしょうけれども、私は 2 階の席から先生の説教を聞かせていただき、助けていただきました。そのことをお伝えしたくて、出てまいりました」。ただそれだけの会話でしたから、詳しいことは分かりません。ただ、何かしら問題を抱えておられたのでしょうか。そんななか、理由は知る由もありませんが、日本語の説教をお聴きになりたかったのだらうと思います。私の説教は昔も今も、いわゆるおもしろいものではありません。なのに、こんな方がいらして、自分のことを忘れずにいてくださったというのは、この私にとって 慰めであり救いでした。こんな自分でも何かのお役にたてたとは・・・。その方はそのようにして、課題の中で聖書に向かい、その御言葉から日々の支えを聴き取られたのだらうと思います。そして、この私は私で、その方の一言によってかろうじて救われた。こうして、それぞれが課題や闘いを生きるなか、イエス・キリストの顧みを繰り返し頂き、信仰の出来事を再体験するようにして、それぞれに信仰を育んでいただいたのでした。生けるキリストが御手を伸べ、そのことをしてくださいました。その御言葉を通して、そのようにしてくださったのだと思います。

召されてすでに 50 年になりますが (1968 年没)、ノーベル平和賞を受賞したあのアメリカのキング牧師のことは誰もがよく御存じかと思います。黒人の自由解放のために大きな働きをした牧師でした。しかし、恐れも知らずに勇敢に戦ってそうしたと 普通はそう思われているこのキング牧師が、実は恐れと迷いのなかで何度もビクつき、挫けそうになりながらそうしていったということ。そのことについては、あまり知られていないのではないのでしょうか。キング牧師の自叙伝に『自由への大いなる歩み』という本がありますが、それを読み返すと、そのことがよく分かります。自宅に爆弾を投げ込まれる。命までも狙われる。その運動を潰そうとする者たちの脅しを前にして、何度も恐さに怯え、勇気が萎えて くず折れそうになったと告白しておられます。あのキング牧師にしても、この私たちと同じように、容易でない毎日のなかで不安や怯えに襲われ、迷いや落ち込みに苛まれたというのです。けれども、そのなかで、そのたびごとに、心が神様の方へと向けられていったのでした。「あのとき、こうだったではないか。このときも、ああだったではないか」と、それまでのことを繰り返し思い返しながらか、それらを何度も再体験するかのようにして、神様の方に心が向けられていきました。そして、やっと、次のような告白にまで導かれたと語っています。「僕はベッドから飛び起きて 床の上を歩き始めたが、ついに台所へ行って、コーヒーポットを温めた。僕はすべてを断念しようと思った。前に置いたコーヒーカップには触れもしないで、卑怯者のように見られないでうまく運動から抜け出す方法はないかと、僕はあれこれ考え始めた。そして、勇気がすっかり挫け去って疲労困憊したこのような状態の

なかで、僕はやっと、問題の解決を神様にお任せしようと心に決めたのだった。両手で頭を抱え込んで、台所のテーブルの上に身を伏せて、僕は大きな声で祈りをささげた。『私の力は今まさに、尽きようとしています。今、私の中には何も残っていません。私は、独りではとうてい立ち向かうことのできないところにまで来てしまいました』。この瞬間、僕は神様の御前みまへにあることを感じたのである。『正義のために立て。真理のために立て。神は汝なんじの傍らにいますであろう』。そのように語る『内なる声の約束』を聞くことができたように思われたのである。このように、キング牧師もまた、そうそう容易ではないそのところで、もっと強くてもっと確かな自分へと育まれていきました。もっと深くてもっと前に進む信仰へと育まれていきました。

このように、私たちもまた、時にはアイスクリームでなく「ほうれん草」の中からビタミンをもらう信仰を期待されているのかもしれませんが。弟子たちは実際、そのようにして一回り・二回りと少しずつ、大きく確かなそれへと培われていったのだらうと思います。そして、ようやく、「あなたはどなたですか」(12)とイエス様にそのように聞く必要もないほどに、それほどまでに「主であることが分かる」(12)ようにされていったのではないのでしょうか。

「153 匹もの大漁」というのはまさに、そうした弟子たちの「感謝」の思いの詰まったものではないか。私は、「153」というその数字の内に、弟子たちのそのような思いを見る気がしています。「153」という数字については、頭を捻ひねらねば分からないような そんななんともややこしいものも含め、実際、いろんな解釈がなされてきました。「153」というのは古代の世界で魚の種類しゅるいの全体を表わす数で、つまり、イエスの福音がすべての民族の心を捕らえるということの意味している」と、そのように理解するのもその一つですが、詳しいことは「基本の学び」の資料に書き出しておきましたので、どうぞ そちらを御覧ください。ただし、それらはどれもがいま一つ裏づけに欠けるもので、あまり確かなものとは言えません。そんなわけで、この私はこう思っています。弟子たちは、——こう言っみては身も蓋ふたもないのですが——とれた魚の数をそのまま単純に数えたのではないか。そうしたら、実際「153 匹」だった。事柄としては、単純にそういうことだったのではないかと思っています。事実、漁師たちは当時、とった魚の数をその場で数えたと言われています。なぜならば、漁師たちの全員でその魚を分け合ったからでした。そのために、全体の数を数えなければなりません。市場いちばに出すにも数えておいたほうがいいでしょうし、大漁のときにはそれでなくても、漁師たちはうれしくなって、漁の成果を数えたと言われています。ですので、弟子たちは魚の数を数えたのだらうと思います。そうしたら、なんと、153 匹もの大漁だった。しかも、それは、ほかでもありません。主イエスが自分たちのために心を砕いて、自分たちのことを顧みて与えてくださった、その「慈しみの魚」でした。そのことを、その場に立ち会ったこのときの弟子たちはきっと、その後の教会のみんなに話して聞かせたのではないのでしょうか。「153 匹もとれたんだぜ！ 153 匹も！」夢中になって、熱心に語ったにちがひありません。なので、その数が今月の箇所箇所にきちんと律儀りちぎに書き留められたのではないか。その後の教会の中でおそらく、「153 匹のもったいない恵みの

話」として、この話が言い伝えられていったのではないか。そのように私は想像するのですが、皆さんはどうお思いになられるでしょうか。同じように考える人も、実際、少なくありません。いずれにせよ、ガリラヤの湖でのこの 2 度目の大漁の出来事を、弟子たちは決して忘れることがなかったと思います。

これが今月の聖書の物語です。「それにしても、ここでもまた」と思わされるほどに、それほどの思いを込めて、愛する弟子たちのためにイエス・キリストが事を「再体験」させてくださった、その慈しみの記録のように私には思えてなりません。そのイエス様がこの私たちのところにも、今ここで・明日もまた別のところで、同じようにして臨んで導いてくださる。そのことを 私たちは信じて、歩みを前に進めたいと思います。それを、弟子たちが必ずや思い起こしたにちがいないイエス・キリストのもう一つの御言葉に心を寄せながらそうしたいと願っています。それは、初めの大漁の後に、主イエスが続けて言われた一言です。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる」(ルカ 5:10)。弟子たちは今月の 2 度目の大漁の後、このお言葉を思い起こしたにちがいありません。ペトロは誰よりもそうだったはずですが、ペトロはそうにして、この後すぐに、牧会と伝道の務めへと イエス・キリストによって遣わされることになります。私たちもまた、神様の確かな導きと支えとを祈り求めたいと思います。そして、主イエスのお言葉を心に刻みながら、それぞれの務めに励んでいきたいと願います。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたの教えと諭しを感謝いたします。しかし、一歩進んだかと思うと、そこで立ち尽くし、脇に・後ろにと 思いをまた引きずられる、そんな経験を私たちは繰り返させられています。どうか、私たちの行く手に、私たちの思いを超えた あなたの心配りを用意してください。信仰を身につけるに遅いときがあっても、どうか 放り出すことなく、何度でもそうしてくださいますように。

弟子たちに示してくださった深い慈しみを感謝します。その同じ恵みを 私たちもまた信じることのできる者とし、その信頼のなかでなすべき務めに大胆に進んでいける私たちとしてください。

おぼつかない歩を進めるその先々で、あなたの御旨をお示してください。そして、それに気づき、それに従う私たちとしてくださいますように。

愛する主、御子イエス・キリストの御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン